

たった一棟で2年間、 大自然と向き合う日々。

岩部 もう23年も経ちますが、私がスウェーデンヒルズに越して来てから。我々もすっかり「旧友」ですね。

近藤 そうですね。岩部さんが越して来られてすぐの冬が大雪だったのを覚えています。

岩部 そう、今でも冬を迎えるたびに、「お手数かけたなあ」とありがたき思い出しますよ。通勤していた私が家を出るのは朝6時。それまでに管理センターの方々が、家から国道337号までの道を広げていねいに除雪してくれました。たった一軒の住人のために毎朝のことでした。吹雪の休日に、管理センターの方がスキー着用で雪をか

対談 スウェーデン ヒルズの軌跡

The History of
**Sweden
House**



日本にも本当に豊かな住まいを。
そして個人の生活を充実させることから、
“新しい世紀”を拓きたい——1980年、北海道石狩郡当別町に
2棟のスウェーデンハウス実験棟が建てられてから28年。
スウェーデンヒルズはスウェーデンハウスの
企業理念の礎として、現在も成長を続けています。
スウェーデンヒルズの住人第一号である岩部明様と、
開発にスタート時から携わったスウェーデンヒルズ
開発担当者の近藤孝二氏に、
当時の思い出を語っていただきました。

いて郵便を届けてくれたことなども、ありがたき思い出されます。
近藤 当時の管理センターの一番重要な役割でしたからね(笑)。昔は今のようには道路も整備されていませんでしたし、自然環境も厳しかった。この広大な土地にたった一大家族で2年間：転々大変ではなかったですか？
岩部 とんでもない。むしろ管理センターの気配りに感謝していました。通勤に時間がかかろうが、吹雪に閉ざされようが、素晴らしい自然と、快適な住環境があれば、それで良かった。ずっと北海道に住んでいて「冬をいかに快適に過ごすか」ということが、住宅の命題だと思っていましたから、スウェーデンハウスの頑丈さ、断熱性の高さには惚れ込んでました。

スウェーデンヒルズ第一号オーナー 岩部明様



スウェーデンヒルズ開発担当者 近藤孝二氏



焦って売ったりはしない。
価値が分かる人に住んで欲しい。

ゆつくりと成熟していく
街と人を見つめて。

今でも空気はキレイだけど、当時はもっと澄んでいた気がするね。空気が澄んでいるから、吹雪が吹いてもそれが美しいとさえ感じられる。結露しない窓の内側から、狂ったように舞い踊る雪と風を、グラス片手に飽かず眺めていたものです。

近藤 岩部さんは登山上級指導員として冬山も熟知されておられるので、その点は不安などなかったわけですね。他の面ではどうですか。当時何か不安はありませんでしたか？

岩部 一番心配だったのは、自然が素晴らしい土地は医療関係施設から遠い、ということでしょうか。ほとんど年を取るわけだから、一番気になる部分でした。しかし、札幌大橋ができれば、札幌は大変近くなると聞き、「それなら安心だ」と。札幌の文化にも触れながら、大自然を堪能できる…これは贅沢ですよ。この丘で初めて見た夕日の美しさは、今でも忘れられないね。手を伸ばせば触れられるんじゃないかというほどの大迫力で、真っ赤に燃えて石狩湾に沈んでいた——しかしまあ、すごい場所にすごい村を作ったものです。周囲が全て森林・灌木地帯、遊牧地帯だったわけなんですから。

近藤 開発に携わった頃、私はまだ29歳。不動産の知識もあまりなく、何もかも手探りの状態でした。ただ、当時の社長が理想の住宅をスウェーデンに見出し、高く掲げた「理想のニュータウン」に向けて、情熱だけがありました。着工までの3年間は、スウェーデンヒルズの開発許可やスウェーデンハウスの事業の立ち上げ、スウェーデン交流センターの設立認可等、同時並行で様々な事業が、絡み合いながら進んでいきましたが、担当各部署は皆、困難を避けようともせず、熱意を持って取り組んでいましたね。電気・電話の地下埋設設備の導入に関しては私も大変苦労しましたが、今となつては良い思い出です。

岩部 地下埋設でなければ、この丘の魅力は半減したでしょう。
近藤 おっしゃるとおりです。でも実はあまりに大変で、ビレッジ地区だけにしとこうかという話も出たんですよ。まあ、結局は初志貫徹で、全地区に導入したんですが。

岩部 当時は私たちのためにいろいろと尽力してくださり、会社

としては大変だったでしょう。

近藤 当時の社長から「二人の人を満足させられないようでは、他の大勢を満足させることなんかできない」と言われていましたし、私もそう思ってた管理に当たっていました。焦りや不安などは、一切ありませんでしたよ。岩部さんのように、この大自然が織り成す四季の変化を楽しめる人、高性能のスウェーデンハウスを良しとする人はきつという。この街の価値が分かる人たちに、この住宅を提供すればいいんだと思っていましたから。

岩部 確かに、ここに住もうとやって来る人は異口同音に「自然がいい」と言います。「自然が媒体」でつながっているというのが、我々住人の強みなのではないかな。価値観が似通っているから、近所づきあいもしやすいというわけです。

23年間で、スウェーデンヒルズは変わりましたか？

岩部 やはり「住宅環境」というのは、赤ちゃんの声がして、子どもたちが走り回って、散歩するお年寄りがいて、とバランスよく成熟していくべきものだと思います。だから、第一号の住人として責任を感じて、初代の町内会長を務めたり、個人的趣味から町内会報を発行して、ヒルズの記録を残そうとしました。イースト、ウエストと人が増え、整備が進んで、管理センターもより緻密に配慮をしてくれています——自然に関して言えば、そっくり昔のままとはいえないけれど、人が増えれば仕方のない部分はあります。

近藤 町内会活動など、当別町との交流も盛んですね。

岩部 日本唯一の夏至祭など、イベントの時には町中本場に賑やかです。また、ヒルズ内にある交流センターにはガラス

工芸や木工芸の工房もあり、たくさんの方が集います。みんな、和気藹々といったところです。

近藤 本州からの移住が55%、道内からの人が45%というバランスも、いいのかもしれません。しがらみや、余計な風習などがありませんから。
岩部 そう。誰もが同じスウェーデンハウスに住んでいることもいい。しかも外壁はベニガラ色で：私はこのベニガラ色が大好きですね。樹々の緑にも、純白の雪にも美しく映える。それはもう素晴らしいコントラストです。この色を生み出したというだけでも、スウェーデンという国は素晴らしい(笑)。ここにスウェーデンヒルズを作ってくれた関係者のみなさんには、本当に感謝しています。

近藤 岩部さんのような方が第一号の住人で本当に良かったと思っています。本当にこの20余年、スウェーデンヒルズは岩部さんを始めとするお一人お一人のおかげで、こんなに住みやすく、変わらぬ美しさで成長してきたのだと思います。感謝にたえません。これからこの丘の歴史の語り部として、スウェーデンヒルズを見守っていただきます。今日はありがとうございました。

